

# 「最裏級の醤油」発売

5月23日に、「最裏級の醤油」が発売された。製造元である(株)有田屋は、江戸末期の1832(天保3)年に中山道・上州安中宿沿いに創業された、伝統ある醤油醸造元である。

有田屋があるのは群馬県安中市。新島襄が帰国後初めて福音の種を蒔いた歴史的な場所であり、言うまでもなく同志社とは非常にゆかりの深い土地である。また3代目当主である湯浅治郎氏は、新島に師事してキリスト教の教えを受けたいわば「教え子」であり、後に同志社理事や衆議院議員も務めた。その教えに根ざしたもののづくりの精神は、いまだに有田屋の醤油造りに活かされているという。同志社における「湯浅」といえば、同志社徽章を制定した詩人・オリエント学者の湯浅吉郎(半月)、第10・12代同志社総長を務めた湯浅八郎がいるが、治郎から見て吉郎が実弟、八郎が息子である。このあた

りからも、同志社と湯浅家・有田屋の深い関わりがうかがえる。

「最裏級の醤油」は、明治期からの仕込み蔵で、古来からの天然醸造法でじっくり醸造した濃口醤油をベースとしたもの。素材は2年間じっくり寝かせた群馬県産大豆を100%使用、調味料は本みりんや料理酒も厳選したもののみと徹底しており、そのこだわりぶりは、有田屋の現社長が数ヶ月間も京都の料理屋に通って試行錯誤を重ね

たことから筋入りだ。さて味についてだが、有田屋本来の関東風の濃い味ではなく、関西風の薄味にアレンジされている。そのため関西風すぎ焼きはもちろん、煮物・焼き物や漬けマグロ、卵かけご飯などの幅広い楽しみ方ができそうだ。

同志社大学と有田屋初のコラボレーション作品となる「最裏級の醤油」。じっくりと熟成されたこの縁に思いを馳せながら味わっていただきたい。



## 600キロの彼方からの授業支援に奮闘!!

— 東日本大震災による被災大学への応援・モバイル型遠隔情報保障システム —

同志社大学学生支援センター・障がい学生支援室

京田辺校地学生支援課長

田鍋 耕三

3月11日、宮城県沖を震源とした巨大地震は津波被害とも合わさって東北地方に大きな爪跡を残した。被災エリアに立地する多くの大学も教育、研究設備から電気、ガス、水道などのインフラ設備まで甚大な損害を受け、授業開始も大幅な遅れとなった。

また、このような状況の中、各大学で学ぶ障がいのある学生への授業支援の問題が発生したが、聴覚障がい学生への支援組織である「日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PePNet-Japan)」が、筑波技術大学が開発した「モバイル型遠隔情報システム」を活用した授業支援の呼びかけを全国の連携大学を中心に行った。

このモバイル型遠隔情報システムとは、情報保障が必要な場所から遠く離れた場所にいる通訳者が連携しながら、スピーカーの言葉を聞き取った「パソコン要約筆記」の内容をインターネットを介して、聴覚障がい者が手元に持つ携帯電話やiPhoneの画面にリアル

タイムに発信し、写し出すというシステムである。特長として、被災地側が用意するのは、iPhoneと専用マイクだけで特別な設備が何もしらないところにある。

この特長をうまく活かして支援にあたった遠隔地の大学の学生ボランティアたちは、パソコンとイヤホンを使って被災地の大学で授業を受ける聴覚障がい学生への支援を行っている。

本学においても、支援要請にただちに応えて、「モバイル型遠隔情報システム」の技術講習を筑波技術大学から4月に受け、5月6日から宮城教育大学の授業支援を開始した。

現在、東北地方の複数の大学の授業を全国11大学が支援しているが、なかでも最大の学生支援スタッフ数(約30名)を擁しているのが本学学生支援室の学生たちである。

寒梅館2階に「東北地区大学情報保障支援室」を2室設置し、自分たちの授業の合間を縫って、宮城教育大学、

東北福祉大学、東北生活文化大学の授業支援(週8コマ)を精力的に担っている。

日頃の学内での情報保障とは異なり、遠隔からの音声だけによる情報を拾い、パソコンに入力、発信するという高い集中力と技術力が求められるが、支援を受けた聴覚障がいの学生たちからは「遠隔地で入力しているとは思えないほど質の高い字幕になっている」と喜んでいただいている。

5月6日の支援開始以来、これまでに延べ約113コマ(約1万時間)の授業支援を行ってきたが、これからも東北の被災大学の授業が正常化するまで、遠く離れた京都の地からの応援を続けていきたい。



# 現代社会学部講演会 「地球のステージ」(震災復興編) 公演

女子大学現代社会学部教授 藤原 孝章

(stragon.co.jp) 代表の桑山紀彦氏をお招きして公演会を開きました。

「地球のステージ」は、代表の桑山氏が海外での体験や国際協力の活動について、現地で撮影したビデオや写真を投影しながら、自ら作曲した歌唱とギター演奏と語りで構成するメディアミックス型の公演です。

ステージは、同志社女子大学(京田辺キャンパス)新島記念講堂で、6月28日に行われました。参加者は外部一般の方も含めて約200名でした。

内容は、ジャワ島震災、パレスチナ紛争、ヒロシマ原爆、東日本大震災の4つから構成され、特に今回は自らが被災した者として、被災者の医療やこどもの心のケアを担いながらの「語り」であり、外部者と内部者の複合した視点が印象的でした。

公演後、桑山氏を囲む会では、準備



同志社女子大学現代社会学部では、社会システム学会との共催イベント「震災復興に向けて同女からエールを送ろう」の取り組みの一環として、東日本大震災における被災者の心のケアに取り組んでいる宮城県名取市の医師であり、かつ紛争地や災害の現場での国際医療協力活動に携わっているNPO法人「地球のステージ」(<http://www.stragon.co.jp>)



桑山紀彦氏を囲む交流会

や進行を担った、社会システム学会の「国際こども研究会DEC」の学生たちが事前学習を踏まえた質問をして意義ある交流ができました。